金曜日

世界は震撼した。　予言機械開発チームによって、予言機械の存在とその正確さを証明するデータ、そして、地球が滅亡するという予言機械によって導き出された地球の未来が発表されたのだ。すぐに、世界対策本部が設置され緊急会議が開かれた。「日本はなぜこのような重大な情報を今まで黙っていたのだ。」「そもそも、予言機械を開発して何を企んでいたのだ。」一斉に日本バッシングが始まった。アメリカからも、同盟を破棄され、日本は世界的な信用を失った。　世界会議では、世界中の学者を集めて何故地球が滅びるのかを解明させる議論がなされたが、結局なにも分からなかった…。

土曜日

ついに、地球滅亡前日。世界各地では混乱が起き、様々な暴動やテロが続発していた。特に、現状の欧米中心のあらゆる体制に日ごろ不満を募らせていたアフリカ人やイスラムの過激派による欧米へのテロは、もはや戦争の域にまで達していた。これに対して、アメリカはついに核爆弾を打ち込んでしまった。そして、これが発端となり世界核戦争が勃発してしまった。

日曜日

この核戦争により多くの人々が命を落とし、地球は核原子の浮遊により、もはや人類が生存できる環境ではなくなってしまった。そして、予言機械の通りに地球は滅びた…。
これは、人間が踏み入れてはいけない「未来を知る」という行為に対する神からの報いだったのかもしれない。予言機械なんて作らなきゃよかったのに…。

月曜日
ケータイのアラームがいつも通りの時間に鳴ったので起きた。朝ご飯を食べる暇が無かったのでコンビニで買い、満員電車に乗って学校へ行った。パソコンの授業を受け、その後はバイトに行ってから家に帰った。

火曜日
目覚ましがいつも通りの時間に鳴ったので起きた。時間に余裕があったので、ニュースを見た。また株価が過去最高値を記録したらしい。地価もどんどん上がってる。バブルの頃に戻ったような景気の良さだ。今日は授業をサボって友達と夜まで遊んで帰った。

水曜日
凄まじい爆音で目を覚ました。どうやら近くで空襲があったようだ。敵国アメリカの戦闘機がバラバラと頭上を飛んでいった。そろそろ疎開を考えた方が良いかもしれない。今日のご飯はおにぎり 1 つだけだった。

木曜日
まだ朝日の昇らない時間に母親に起こされて、畑仕事を手伝った。年貢がまた上がったので、最近は粟やひえばかり食べている。しかし将軍様のためには我慢しなければならない。

金曜日
今日は目を覚ましてから、木の実を拾いに行った。

土曜日
寒い。寒すぎて周りの生き物が死に絶え始めた。

日曜日
マグマオーシャンになった。

月曜日。いつも通り目を覚まし、朝食をすませて学校へむかった。学校に到着し、教室に入ると妙な違和感を感じた。
「何かがいつもとは違うような … 。」
そう思って友達に尋ねてみた。
「今日ってさぁ、なんかいつもと感じ違うと思わない？」
「何言ってんだよお前。まだ寝呆けてるのか？何にも変わってねぇじゃねぇかよ。いつも通りだよ。」
言われてみると、そのような気もするが、何かと言うより誰かを忘れているような気がする。その違和感を気に掛けながら僕は帰宅し、早々に床に就いた。

火曜日。またいつも通り起床し、朝食をとって学校へむかうとまた違和感を覚えた。昨日までとは何か違う。
「そういえば、この教室ってこんなに広かったっけ？」
そんな違和感を胸に抱きつつも僕は授業を受けていた。
「机と椅子の数は生徒数と同じだから、やっぱり最初からこのままだったんだな。思い過しだったのか … 。」
僕は１人で納得していた。この違和感を解消するために。

水曜日。また、いつもどおり起床して朝食をとり、学校へむかった。しかし、通学路で誰にも会わない。学校に到着してもやはり誰も見当たらない。どうやら学校の生徒全員がいないみたいだった。誰もいない学校。そこには僕１人しかいなかった。そこで初めて月曜日に初めて感じ、今まで抱いていた違和感の正体に気付いた。僕の周りの人が徐々にいなくなっているということに … 。しかし、いなくなったという状況は理解できたものの、消えた人たちの顔がどうしても思い出せない。どうやら存在と共に僕の記憶も消されていってるようだった。どんな人がいて、僕がどんな人たちと関わっていたのかは全くわからないものの、広い学校にただ１人というのはとても淋しかった。この日もすぐに家に帰り、寝てしまった。

木曜日。朝目が覚めるとやけに静かだと感じた。簡単に朝食をすませ、外へ出て、近所をぶらついてみた。だいたい３０分くらい歩いただろうか。しかし、誰とも会わない。まるで町全体がゴーストタウンのようになってしまったかのようだった。学校みたいに今度はこの町からも人が消えてしまったみたいだ。どんな人が住んでいた全く思い出せない。しかし、僕以外に誰１人としていない世界にただ１人取り残されてしまうのではないかという不安を覚えた。
「いつまでもこうしていても仕方がない。家に帰るか … 。」
そう思い、家に戻ってその日はただ何をするわけでもなく１日を過ごした。

金曜日。周りからどんどん人が姿を消していく。そのような信じられないけども確かに起こっている状況から僕はあわてて彼女に電話した。１コール、２コール、３コール … 。もうどれだけ彼女の携帯を鳴らしただろうか。まさかと思い、あわてて家を飛び出し彼女の家に向かった。彼女の家に着き、呼び鈴を押す。１回、２回、３回 … 。やはり出てこない。失礼だとわかっていながらも家のドアを勝手に開けてみた。しかし、誰もいない。どうやらついに僕の大切な人の存在も消されているみたいだ。

土曜日。ついに１番身近な存在である家族が消えていた。もうこの世にはおそらく僕の存在しかないだろう。

そして日曜日。僕にはその日がくることはなかった。そう、僕は最後に僕自身の存在を消してしまったのだ。こうして世界から人間の存在がなくなった。

そういえば、最近、ＰＣがフリーズしない。一昔前のパソコンなのだが、購入当初は、ちょっとしたことで、フリーズしたものだ。メールとネットでのニュースチェックに使っているだけなので、使い続けている。毎日こうやって、旧式ＯＳのパソコンでニュースをチェックしているが、快適に使えている。購入当初より、フリーズの回数は格段に減っている。ＰＣが常時ネットにつながってからは、自分のＰＣが、何処とどんな情報をやりとりしているか、何もわからなくなっている。きっと、自動的にフリーズしないようなアップデートがかかっているんだろう。

月曜日
『気象庁発表、昨年度の天気予報の的中率９６％を越える！』

昔は天気予報なんて「当たらないのは当たり前」だったのに、科学も進歩したものだ。自慢のスーパーコンピューターのおかげか？いや、導入当初からしばらくは的中率の向上はなかったはずだ。予報プログラムを変えたおかげかな。なになに…。ここ数年の的中率の向上については、気象庁でも、首をひねっているのか。予報官の感がさえていたという事なのか？でも、良いことだ。

火曜日
『交通死亡事故の減少の一途、昭和３０年代前半の水準へ』

あんな悲惨なものはない。一瞬にして被害者、そして加害者の人生を変えてしまう。教習所で教わった通りに運転していれば、そう起こるものではないのだ。でも、そうはいかないのが実情だ。運転者の意識が、ふと、ほかの事に向いてしまったり、一瞬の迷いの末の判断の結果が、間違った側に向いてしまう事で起こることがほとんどなのだ。コンピュータアシストの付いた車も普及してきているようだが。なになに…。そのせいでもないようだ。まあ、良いことであることに間違いなさそうだ。

水曜日
『ガン撲滅間近かか。ガン発症率極端に低下』

人類がガンに本気で取り組み始めて、もう長い期間が経つ。天然痘に続いてガンもいよいよ撲滅か。発ガン物質の特定、排除。抗ガン剤の開発。通常細胞のガン細胞化過程の解明。いろいろなことを研究してきた努力が実ってきたのかな？　おや、違うようだ。なになに…。どうやら、人間の細胞がガン細胞になりにくくなったようだ。発ガン物質に対して、抵抗力を持ったってことか？しかし、細胞がガン化するのは、発ガン物質によって、ＤＮＡが傷つき、その

損傷が自己修復の限界を超えて、細胞分裂が暴走するからのはずだ。自己修復機能が向上したって事なのか？ウィルスレベルならまだしも、ほ乳類のような複雑な構造の生物が、そんなに短時間に「進化」するわけがない。発ガン物質が排除にも限界があるし、次々と新しい発ガン物質も見つかっている。では、なぜ細胞はガン化しなくなったというのだ。でも、まあ、良いことだろう。

木曜日
『今年のベストヒット商品　うまい棒に決定！』

　確かにあれはうまい。今でも無性に食べたくなって買ってしまうことがある。きっと私のような輩が、今年は急に増えたのか？そもそもヒット商品なんていうのは、だれもが気付かなかった便利さに対する開発者のインスピレーションと、その冒険を許す企業の決断力から商品化され、その商品に時代のニーズが合致して生まれるものなのだ。　待てよ、なになに…。『４０年間の地道な販売の成果が評価される。』少しも「今年のベスト」じゃないな。日本の企業人にはインスピレーションも決断力もないってことか？まあ、しょうがないのだろう。

金曜日
『公営ギャンブル閉鎖相次ぐ』

　ギャンブルなんて、平和な家庭生活が破壊される大きな原因である。「百害あって一利なし」である。もちろん、趣味として、娯楽として楽しんでいる人はいるだろうし、ヨーロッパでは、元々そのように嗜好されている。それなら、平日に開催される必要はない。やっと、地方自治体もそのことに気が付いたのか。　おや？なになに…。大穴がでなくなったのが原因なのか。ここ数年の統計でも、確実に万馬券が減っているのか。そのため、事前の人気通りの結果がでることがほとんどで、投票も１番人気を買う人がほとんど、当然配当も減り、投票する人も減る。もちろん、主催者の利益も激減で赤字経営。最近は的中精度の高いソフトがパソコンで動くそうだ。そのせいかもしれない。私には関係ないことだ。

土曜日
　テレビを付けたら、『ノーベル賞学者に聞く』という番組をやっていた。途中からだったが、とりあえず見てみた。

　……教授：　ここからちょっと難しくなりますが、そもそも科学現象は非線形微分方程式の重ね合わせで表されるんです。この「非線形微分方程式」というのはやっかいなものでして、初期条件の違いが、結果として

導かれる関数の劇的な違いをもたらすものなのです。たとえば生物の神経はある一定値までの刺激に対しては、興奮を起こすことはないがその値を越えると、興奮状態になり、信号を伝達していくわけです。司会者：　そうですね。それは高校の時に勉強した覚えがあります。教授：　これを閾値と言ったりしていますが、自然現象の中にはこの閾値をもった現象が非常に多いんです。現実の複雑な系にたいして、方程式を作ろうとすると、ほとんどの物に、これが関わっているんです。人の思考や感情などにも、当てはまるんです。人間のインスピレーションとか、感情とか、うっかりミスとか、そんなものも閾値または、その連鎖によって引き起こされるのです。大きな現象では、気象変動や、恒星の一生、宇宙そのものの構造などにもあるんです。それらの値がなぜその値なのかを統一的に解釈できた理論と言うことです。自然現象その理論の中で最も重要な、そして唯一の定数が kcnalp 定数ということなんです。
司会者：ちょっと難しいのですが、なにしろ「重要なテ・イ・ス・ウ」なのですね。定数というと例えば他にどんなものがあるんでしょう。
教授：　そうですねぇ。光の速さってありますよね。秒速３０万ｋｍっていう。
司会者：はい。一秒で地球を７周り半ってやつですね。
教授：　　そうですね。この光速っていうのは、正に自然現象を規定する定数ですね。もっとも光は直進しかしないので、実際に「７周り半」する訳じゃないんですが。あの数字は、この宇宙のどこへ行っても変わらないんですよ。そして、物理現象を理解するための重要な数字になっているのですが、そのような定数をもう一つ見つけたって言うことなんです。
司会者：　では、その定数も、宇宙のどこでもかわらないんですか？
教授：　　空間的には、そのとおりです。
司会者：　空間的にはとおっしゃいますと…。
教授：　　時間的にはわからないんです。最近なんだか急に変わっている実験結果もあるんですが、これは別の問題なので、また別の機会ということでおねがいします。

　　ここまで聞いてチャンネルを変えた。　やっぱりわからん。「ホウテイシキ」という言葉が聞こえた段階で、思考停止だな。

日曜日
　久しぶりに映画を見に行ったが、とてもつまらなかった。ＴＶにでていた映画評論家は「涙の名作」といっていたが、少しも感情が動かなかった。久しく心が動かされた記憶がなかったので、たまには「感動の涙」でも流しに行こうかとおもったのだが。理屈では、ここが「泣き所」だなと思えるところがあるのだが、涙はでなかった。大人になってしまったのか。でも、周りで見ていた人たちもみな同じようだったような気がするなぁ。

そんなことを考えているうちに何となく家に着いた。しかし、いつも通り家に入ろうと思ったのだが、訳がわからなくなった。玄関の引き戸をあけ、中に入ろうとしたが入ることができないのである。どうしても入れない。どうしてなんだろうと、しばらく考えていたが、何故なのかわからない。なんだか、感覚もおかしくなってきた。どうして家に入れないんだろう。何時間ここでこうしていることだろう。頭がもうろうとしてきてもう、どうでもよくなってきた。

　でも、一つだけ理解できような気がすることがある。なんだか敷居が高くなったような気がするのである。

原口 明子

月曜日。
私はいつも通り大学へ行くため、電車乗った。
それぞれ別々の目的を果たしに、別の場所へと消えていく。

電車に乗ってる人たちは皆個性的。
　　…あのおじさんの髭すごいなー
　　…あ、あの人スタイルいいー
　　…あの子たち、可愛いなぁー
　　…あの男の人、カッコいいー！
そんなことを思いながら、電車に揺られていく。
いつもと何ら変わりない、いつもの月曜日。

火曜日。
私はいつも通り大学へ行くため、電車乗った。
それぞれ別々の目的を果たしに、別々の場所へと消えていく。

電車に乗っているのは、いつもの顔ぶれ。
だけど …
　　…あれ？あのおじさんの髭、あんなに薄かったっけー
　　…あれ？あの人のスタイルってもっと良かったような…
　　…そういえば、あの子たち、顔が似てきてる？
　　…あの男の人、あんな顔だったかなぁ？
ちょっとだけ違和感を感じながら、電車に揺られていく。
いつもとあまり変わらない、火曜日。

水曜日。
私はいつも通り大学へ行くため、電車乗った。
それぞれ別々の目的を果たしに、別々の場所へと消えていく。
　　…あれ？電車に乗ってる人たち、何だかみんなが同じに見えるぞ？
　　…顔もスタイルも、みんなそっくりだ…
　　…あの人はどこだろう？
　　…窓に映る自分の顔…あれ？みんなと同じ？
かなり違和感を感じつつも、電車に揺られていく。
いつもと違う、水曜日。

木曜日。
私はいつも通り大学へ行くため、電車乗った。
それぞれ別々の目的を果たしに、別の場所へと消えていく。

電車の中は、同じ顔、同じ背格好をした人々で溢れている。
着ているものまでみんな似ている。
　…誰が誰だか区別するのは困難かもしれない。
　　（あの人もこの中にきっといるんだろう）
　…いや、区別する必要はないのかな？
そんなことを思いながら、電車に揺られていく。
いつもと全然違う、木曜日。

金曜日。
私はいつも通り、電車に乗った。
だけど、どこへ行くんだっけ？
電車の中は、機械で量産されたような人々が、機械で並べられたように、綺麗に並んでいる。
自分もその中の一人なんだろう。
何があっても皆同じ動作をする。
　…あぁそうか、このまま皆同じ目的を果たしに、
　　同じ場所へと行くんだろう。
そんなことを考えながら、
いや、考えることが出来ているかわからないまま、電車に揺られていく。
いつもと違う？それともいつもと同じ？
そんな金曜日 …

土曜日。……

そして、日曜日が訪れることはなかった。

朝、目覚めると僕の心の中はぽっかりと穴が空いていた。頭の中は無意識と混乱が入り交じり、何かの激しい衝動に突き動かされ起きあがった。
「僕と一緒に地球を壊そう。」
この「僕」とは「私自身」である「僕」なのか、それとも第三者である「僕」なのかはわからない。頭の中では
「地球を壊す」
「地球を壊せ」
「地球を壊す」
「壊せ、壊せ、壊せ、、、」
それ以外には何も考えられない、考えても居なかった。

外の世界は見慣れた光景が広がっていた。

しかし、僕の体は不思議な力で支配されていた。そう、思い通りに世界を動かせる。

大気に膨大な二酸化炭素をバラまいた。オゾン層がオゾンホールと共に破壊され地上に大量の紫外線が降り注いだ。

上空では光化学スモッグが発生し酸性雨を降らす厚い雲が地上を覆った。そして酸性雨が降り森林は枯れ果てた。この雲が紫外線を吸収し高温となり地上は真っ暗な灼熱の大地となった。

海や川には水銀、ヒ素などの有害物質を流しこみ、水面は赤潮が発生し生物の体内は毒でおかされた。
地上はコレラ、赤痢、黄熱病、エイズ、狂牛病、狂犬病、鳥インフルエンザなどのありとあらゆる伝染病が蔓延し、もう誰も生きることができない。ついには、人類に存在するすべての核兵器が爆発し、人類は滅び、地球は壊れた。

そして僕は目を覚ました。どうやら七日間も眠っていたようだ。地球はこわれていなかった。僕は生きていた。

でも、もし遠くない将来、近い未来にこのような事が起きたら地球は壊れ、人類及び生態系は消滅するかもしれない。

そして今、刻一刻とこのシナリオにむけてのカウントダウンが進んでいると僕は怖くなりもう一度眠りについた、、、。

月曜日、いつものように朝起きてタバコを吸う。いつもと同じ味を感じシャワーを浴び学校へ行く支度をする。今日も外は寒いので自転車で行くのをあきらめ、祖師ヶ谷大蔵の駅まで歩いて行き切符を買う。いつもより少し早い電車に乗れた。成城学園前に着きポケットからタバコを取り出す。天気も良くいつもより美味しく感じる。ローソンで朝ご飯を買い、教室へ向かう。授業が終わり昼食を食べる。食事の後の一服もまたいつもどおり美味しく感じる。家に帰り、夕食の支度をしながらまた一服。いつもと何一つ変わらない生活と何一つ変わらないタバコの味。

次の日もまた、昨日と同じ朝を迎える。朝のタバコもいつもと同じ。が、ちょっと違う。少し苦しい気がしなくもない。疲れているのかと軽く考えいつもと同じように支度をする。今日は自転車で行くことにした。自転車に乗りながらタバコを吸う。学校でもいつもと同じようにタバコを吸うが、朝のように苦しく感じることはない。夜に朝のことを思い出したが、何も変わらないので気にせず眠りにつく。

水曜日、寝坊してしまって午前中の授業は無理だ。とりあえずご飯も食べたいので着替えて急いで学校の学食へ向かう。急ぎつつも自転車に乗りながらタバコを吸う。昨日よりまたちょっと苦しい感じがする。学校に着きご飯を食べたあといつもと同じようにタバコを吸う。さっきより少し楽になったので気にせず授業に出る。

木曜日。今日は寝坊せず起きた。とりあえず一服するが、また昨日より一段と胸の辺りが苦しい。風邪でもひいたかなと思い、今日はタバコを少なめにする。でもやはりいつもの癖で昼食の後は吸ってしまう。夜、考えるといつもより吸った本数は少ない。

金曜日、また寝坊してしまった。２限には間に合いそうなので急いで準備をする。学校についてお昼に気付く。今日はまだタバコを口にしていない。なんか変な感じがして慌ててタバコを吸う。やはりこの感じはいい。でも日を追う毎に苦しくなっているのがわかる。

土曜日。起きたときからなんだか苦しい。でも習慣として朝一のタバコを吸い、１限の授業へ向かう。どうやら風邪はひいてないようだ。でもタバコを吸うととても苦しくなる。

日曜日は昼過ぎまで寝ていた。今日は掃除する予定だったが、寝坊したためあきらめる。起きて窓を開けいつもと同じくタバコを吸う。おかしい。吸えな

い。私はタバコの火を消しベッドに倒れこむ。肺が犯されてしまったようだ。
私はタバコの箱に目をやり、目を閉じた。

月曜日
　朝 6 時、いつも通り目覚ましが鳴る。僕は時計に手をやり、ベルを止めた。布団から出ると、まずトイレに行き、用を済ます。そして洗面所に向かい、顔を洗う。僕の習慣だ。そこで母親から、朝ご飯だと声をかけられ、リビングへと降りていく。ご飯を済ませると、僕は家を出た。いつもと同じだ。しかし、妙な違和感があった。規則的な音楽の音がずれている。そんな違和感だ。なんだろう ‥?
　―キンコンカンコン。6 時間目の授業が終わった。僕は部室に向かい、服を着替え、靴を履き替えた。そして、グラウンドに向かう。今日も一番乗りだ。僕は軽くストレッチをすると、グラウンドを一周した。そうしてその日の調子を確認するのが、僕の日課。‥ 今日はいまいちだなぁ。
　部活が始まり、仲間同士でタイムを計る。11.2 秒。僕の 100 メートル自己ベストは 10.7 秒。やはり今日は調子が悪い。練習を終えると、僕は家に帰った。

火曜日
　今日も 6 時に目覚ましがなり、僕は目を覚ます。いつも通りトイレに入り、洗面所に向かう。そして母親に呼ばれ、朝ご飯を食べる。食事を済ますと、僕は家を出た。そこでまた、違和感を感じる。‥ なにか忘れたっけ？行動を振り返るが、特にいつもと変わったことはない。
　―キンコンカンコン。部室へ向かう。着替えを済ませ、グラウンドへ行くと、何人か部員の姿があった。あぁ、今日は先を越されてしまった。なんとなく落ち着かない感じはあったが、仕方なく、僕はいつも通りストレッチをし、グラウンドを一周する。‥ 今日も何だかいまいちだなぁ。
　今日のタイムは 11.6 秒。昨日よりも落ちている。

水曜日
　今日も 6 時に目覚ましがなり、僕は目を覚ます。いつもの習慣を済まし、学校へ行く。また、違和感を感じるが、なぜだか分からない。
　―キンコンカンコン。部室へ向かう。着替えを済ませ、グラウンドへ行くと、今日も人の姿が。仕方なく、僕はいつも通りストレッチをし、グラウンドを一周する。‥ 今日も何だかいまいちだなぁ。
　今日のタイムは 12.5 秒。昨日よりも落ちている。

木曜日
　今日も 6 時に目覚ましがなり、僕は目を覚ます。いつもの習慣を済まし、学校へ行く。また、違和感を感じるが、なぜだか分からない。

―キンコンカンコン。部室へ向かう。着替えを済ませ、グラウンドへ行くと、今日も人の姿が。ストレッチをしようとしたとき、集合の声がかかった。今日は日課をすることもできず、部活が始まってしまった。いつもより早いじゃないか。

今日のタイムは 15.4 秒。明らかにタイムが遅くなっている。

金曜日

今日も 6 時に目覚ましがなり、僕は目を覚ます。いつもの通り朝ご飯を食べていると、母親に声をかけられる。遅刻するわよ。時計に目をやると 8 時 20 分。遅刻だ‥! 僕は走って、学校へ行った。‥ そんなにゆっくりしていたっけ？

―キンコンカンコン。部室へ向かう。着替えを済ませ、グラウンドへ行くと、もう部活が始まっていた。また遅刻だ。

今日もタイムを計る。40 秒!?　僕はどうしたんだろう。

土曜日

今日も 6 時に目覚ましがなり、僕は目を覚ます。時計に手をやるが、ベルは鳴り続けている。まだ時計に手が届いていない。かなりの時間をかけて時計まで手を伸ばし、ベルを止めた。時間を見ると正午１２時であった。それでも僕は習慣通りトイレへ行き、洗面所に向かうと、母親に、夕飯だと言われた。ご飯を食べると既に深夜１２時になっていたので、僕は眠ることにした。

日曜日

今日も 6 時に目覚ましがなり、僕は目を覚ます。時計に手をやるが、ベルは鳴り続けている。まだ時計に手が届いていない。

僕の体はそれ以上動くことはなく、ベルが止められることはなかった。

鈴木 直登

月曜
　いつものように朝起きてカーテンを開け、窓を開けると朝日が差し込んでくる。今は学校が休みのため陽は軽く上のほうにある。しかし、そんなことは大して気にせず、また窓を閉め二度寝する。
しばらくして起きてみると時計は3時を指していた。急いでバイトに行く準備をする。
外は普通にまだ明るい。バイト場につく5時ごろなぜかまだ明るい。
　「おかしいな、今冬だよな」
奇妙な明るさに困惑する。その日は月を見ることはなかった。

火曜
昨日とほぼ同じ時間に起きて窓を開けると、太陽の位置に違和感を覚える。
　「太陽あんなとこにあったけ」
違和感を覚えつつも朝食を口にする。
その後大して代わり映えのない生活をして一日が終わる。
この日も月や星を見ることもなかった。

こういった夜を見ることもなく、白夜のような世界は、木曜に終わりを告げ、ついに夜が来た。
しかし、この”夜”はただの夜ではなかった。

金曜
朝起きてみると雲があるわけではないのにそとは闇に包まれていた。
　「うそだろ」
なにもない暗黒。
　光のない世界が眼前に広がるのを見ると途端に恐怖がこみ上げてきた。
家の電気だけが朝にもかかわらず辺りを不自然に照らす。
まるで太陽が消えてしまったようなこの現象は、土曜も日曜も変化はなかった。

　そして再び世界に光が灯ることはなかった。

20XX Apr 1
ある男がいた。世界中の科学に興味のある者なら何度となく耳にした事のあるであろう人物である。彼は著名な科学者である。彼は今日、新聞のコラムにこんな記事を載せた。「私が長年研究に励んでいた測定機がついに昨日完成した。これは自然災害を予知測定するものである。これはかつてないレベルの正確な予測が可能である。そのことを踏まえて皆に知らせなければならないことがある。あと一週間で、世界は壊れる。これは事実である。目を背けることなくこの事実を受け止めて残りの時間を大切にすることをお勧めする。
　Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ」

20XX Apr 2
昨日の彼の記事は世界中のメディアを駆け巡った。ある国では今朝のトップニュースで、ある国では昼間のティータイムに流れるラジオから、またある国では真夜中にインターネットから人々に知れ渡った。今日は世界中が彼の記事の話題でいっぱいだった。そして世界中が不安でいっぱいだった。

20XX Apr 3
今日は世界中の偉い人たちが世界中で、人々に今まで通りの生活をするよう訴えたり、食料を集めたほうがいいと言ったり、はたまた北極に行けと言ったり、いろいろな人がいろいろなことを言った。世界中が困惑していた。

20XX Apr 4
今日は世界中のビジネス街が空っぽで、漁港や田畑からも人々がいなくなった。戦争が起こっているはずの地からも銃声が聞こえなくなった。世界中が今どうするべきなのか悩んでいた。

20XX Apr 5
今日はきのうとは打って変わって騒がしかった。でも電車とかバスとかは動いてないから、自動車や徒歩で人々は出かけた。空っぽになった店に入り込んで食物やら宝石やらを持ち去る者もいた。あちこちで諍いが起きた。人々は好き放題なことをした。でも、時間の使い方に世界中は後悔した。

20XX Apr 6
今日人々は愛する者に会いに行った。家族、友人や恋人、恩師に会いに行く者もいれば、誰かが眠る墓に行く者もいた。そして明日で壊れる世界を流れる時間をひとつも残さず大切に過ごした。でも、今日は世界中が悲しみに溢れていた。

20XX Apr 7
今日は世界中が恐怖に怯えてはいたが、何故か穏やかで優しい。人々が互いに想い合い、支えあって寄りそっていた。眩い朝日が昇り、暖かい太陽が照らし、真っ赤な夕日が世界を包むように沈んでいった。まだ世界は残っている。電気がなくなった世界は静かな夜だった。星はキラキラと瞬いていた。いくつもの流星が世界の空をながれた。

20XX Apr 8
きのう地球は壊れなかった。例の科学者は困っていた。新聞やテレビ放送は誰もしていなかったから、どうやって事実を世界に伝えたらいいのか困っていた。あの記事はユーモアで載せたものだってことを。

エイプリルフールから何日も経って世界に日常が戻っていた。しかし誰も科学者を責めなかった。いま世界は愛と平和に満ちている。

２＊＊＊年＊＊月＊＊日。深夜１２時。世界を震度９の地震がおそった。世界にズレが生じ、反対にまわりはじめた。男は今年８０才になる研究者だ。日本の新宿に地下２１階に特別研究所を構え、「どこでもドア」の研究を始めて早５０年。世界をのぞけるドア。今日もドアが完成した。

１０畳ほどの打ちっ放しのコンクリートの部屋にピンクのドアが６つ並んだ。深呼吸をして、ドアノブをぎゅっとつかむ。どこにいくかはわからない。１つ目のドアを開く。ここはどこだろうか？夜なのに、真っ暗闇だ。こんな時間に電灯が１つも灯らないとは。なんて貧乏な国だ。どこにつながったんだろう？しかし、人が溢れているのは確かだ。普通に歩いても人が次々ぶつかってくる。

翌日、さっそく街を歩き回ろうと２つ目のドアを開けた。みんな当たり前のように後ろ向きに歩いている。自動車もバイクもスケーボーもすべて後ろ向きだ。男は戸惑った。ここはどこだ？こんな文化あったのか‥?

３日目、おなかがすいて目が覚めた。なにか朝飯を買いに行こう、せっかくだ、未来ドアで見知らぬ土地へ朝食にでも行こうじゃないか。くしゃくしゃになった１００＄を何枚かズボンのポケットにつっこみ、３つ目のドアを開けた。後ろ歩きする人の並みに逆らいながら、１人前をむいて歩く。人々は冷ややかな視線を男に投げる。その視線に耐えられず、一番近くにあったハンバーガー屋に駆け込む。このチーズマフィンをおくれ。一生懸命、英語をしゃべる。だが、言葉が通じない。メニューは英語なのだが。幸い写真付きメニューがあったので、身振り手振りで買うことができた。

４日目、少しづつ慣れてきた。テラスで今日もマフィンを食べている。今まで感じなかったが、外がやけに明るい。街頭を見ると昼間なのに全部灯っている。今何時だろう？腕時計が止まっていてわからない。世界とはなんて貧富の差が激しいのだろう。

５日目、時計が壊れているので、デパートの貴金属売場に出かけた。しかし、文字盤が逆さに書かれている。短針と長針も逆に読むらしい。なんて見づらい時計だ。貴金属なのに店員がやけに若かったことが気になった。あいかわらず言葉も通じない。何語をしゃべっているのだろう？まわりは少年少女ばかりだ。老人はどこへいったのか？

６日目、扉を開けると、みんな体が透き通っている。溶けない氷のようだ。黒い影だけはくっきり浮かび上がり、不気味だ。明日は親友のタナカが来る予定